

大東文化歴史資料館だより

第19号 2015. 11. 30

「百年史編纂に向けて」

百年史編纂委員会委員長・経済学部現代経済学科教授 中村 宗悦

本年6月17日、歴史資料館運営委員会（以下、運営委員会）において「百年史編纂委員会」（以下、編纂委員会）の設置が決まりました（委員会構成員は下記参照）。その後、9月までに3回の編纂委員会を開き、来る2023年の大学百周年までに資料編および通史編を刊行するスケジュールを確認し、現在、資料編刊行の準備に入っているところです。

すでに運営委員会は、「百年史編纂の意義として、①大学の個性の確認、②アカウンタビリティの履践、③大学評価における大学沿革史の項目化、④情報公開法への対応、⑤自校史教育への活用」を挙げ、本学にとっての固有の意義として、「本学創設時の指導者たちが日本近代史の中で演じた役割を（批判的に）解明することを通して、建学の精神を再確認することが社会に対する責務である」（大学サイトより）としています。編纂委員会においても、これらを踏まえて今後の年史編纂を進めていく所存です。

これまで大学は『大東文化大学五十年史』『創立60周年記念 軌跡』『大東文化大学七十年史』『心は放て天地間、まなこはさらせ世の移り 大東文化大学創立80年誌』『大東文化大学の歩んできた道』などを刊行して参りましたが、百年史はこれらを単純に延長して書かれるものではなく、資料の抜本的な再検討を通じて新たに編まれるものとしなくてはなりません。今回、

はじめて資料編の編纂が計画されているのはそのためです。編纂委員会は、本学百年の歴史を後世の人々のさまざまな角度からの批判に耐えうるものにするために、この資料編をまずしっかりとしたものにする必要があると考え、百年史編纂の方針として第一にこのことを掲げました。

しかし一方で、百年の歳月が資料の散逸を少なからず招いてきたことも残念ながら事実です。百年史刊行までのそう長くはない時間の中で効率的に資料を収集していくために、是非とも江湖の諸兄弟にご協力をお願いする次第です。とくに先の大戦中および戦後間もない頃の資料は少なく、貴重なものとなっています。当時、本学に在籍・在職されていた方々も多く鬼籍に入られています。関係者の皆様には、今一度、お心当たりをお探しくだされれば幸甚です。また先日もとある古本屋で本学の池袋時代に発行されていた大学新聞を見つけてくださった方から現物をご寄贈賜りました。それはわずか4ページのものでしたが、当時の大学の雰囲気を知る貴重なものでした。さらに本学は戦前期より中国やアジア諸地域との関係を深く持って参りました。そうした海外諸地域との関係を明ら



かにする文献も手に入れることがかなり難しい状況です。些細なことでも結構ですので、情報をお寄せ下さればありがたく思います。

さて、今回の百年史編纂事業を契機として実現したいことがもう1つあります。それはこれからの大学史研究をより一層推進していきたいということです。近年、数多の大学で自校史教育ということが叫ばれていますが、そうした教育の基礎には地道な研究が必要です。名門と呼ばれるような大学には早くからそうした自校史研究の機関があり、独自の学術刊行物も発行しています。また必要に応じて各種の研究会、シンポジウム、講演会などもおこなわれています。それらに比較すれば、残念ながら本学の歴史資料館の歴史はまだ浅く、板橋校舎の研究棟1階スペースで企画展示を継続しておこなっていますが、本格的な研究推進母体としてはまだまだ力が足りない面が多いと思います。編纂委員会は歴史資料館の下部機関として百年史編纂を主な任務としていますが、同時に今後は研究紀要を定期的に刊行し、大学史分野のみならず広く日本の近代史に一石を投じるような貢献をなしていきたいと考えています（この計画の具体的内容については、近日中に別途ご案内申し上げます）。

最後に、百年史は当然のことながら次の百年に向けた一里塚にすぎないということを強調しておきたいと思います。編纂委員会自体は、恐らく百年史刊行を一区切りにするようになるかと思いますが、その後も引き続き研究を進め、自らを批判的に省みつつ社会に貢献していくための仕組み作りも重要な仕事の1つと考えています。具体的には学園の各部局に存在する種々の文書等を文字通りアーカイブしていくその仕組み作りがそれに当たります。現在でも歴史資料館はアーカイブスを名乗っていますが、資料

の収集・保存・活用というサイクルをきちんと回せているとは言いがたいでしょう。早急に学園の文書等をどのようにアーカイブして活用していくのかについて、学園当局者とも話し合いを持ちつつ、真のアーカイブスとして認知されるように努力して参りたいと考えています。また一口に資料と申しましても、昨今は映像資料や電子媒体に保管されたデジタル資料などテクノロジーの変化にも追従していかねばなりません。現在は便利に使っている媒体もはたして十年後に活用されるのかという問題は単に大学史の枠にとどまらない大きな問題です。

こうした諸課題はもちろん編纂委員会のみで解決できる問題ではありません。百年史編纂事業を1つのきっかけとして学園関係者の皆様にはもちろんのこと、広く地域の皆様などにも本学の歴史に一層の関心を持っていただき、これまで以上にご協力を賜れば幸甚です。

【百年史編纂委員会委員一覧】

| | | |
|------|-------|-------------------------|
| 委員長 | 中村宗悦 | 経済学部現代経済学科教授 |
| 副委員長 | 荒井明夫 | 文学部教育学科教授 |
| 委員 | 澤田雅弘 | 文学部書道学科教授 |
| 委員 | 宮瀧交二 | 文学部英米文学科教授 |
| 委員 | 吉田篤志 | 文学部中国学科准教授 |
| 委員 | 谷本宗生 | 東洋研究所特任准教授 (歴史資料館出向) |
| 委員 | 石井寿美世 | 経済学部社会経済学科講師 |
| 委員 | 浅沼薫奈 | 東洋研究所特任講師 (歴史資料館出向) |

*なお、資料情報のご提供に関しましては、大東文化大学総務課（大東文化歴史資料館 担当）までお知らせください。

大東アーカイブス 第19回 企画展

大東の国際交流 —異文化理解・国際貢献を見据えて—

展示期間：平成27年10月5日(月)～平成28年3月31日(木)

(開室時間 毎週月～金曜日 9:00～17:00)

展示場所：大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)

第19回企画展「大東の国際交流 —異文化理解・国際貢献を見据えて—」を開催することとなりました。

本学国際交流センターの全面的協力を得て、東松山校舎・国際交流センター内で壁や棚に陳列して常時公開・保管しているものを、今回の企画展に当たりその一部を特別に借用しました。各国の工芸・民芸品や、協定校から記念品として贈られたりお土産として持ち帰ったりしたものです。中国や台湾の大学ペンantや装飾・美術品のほか、インドネシアの民族楽器「アンクルン(angklung)」(ユネスコ無形文化遺産に登録されている長い歴史を持つ伝統的な楽器)、同じくインドネシアの工芸品で長い棒を付した人形を用いた伝統的な影絵芝居「ワヤン・クリ」の操り人形、ネパールの婚礼用夫婦人形、オーストラリアやイギリスの大学からやってきた人形たちです。同時に、これまでの学生たちの短期海外研修の様子も紹介しています。

現在、大東文化大学は、中国、台湾、韓国といったアジアを中心に世界各国・地域の大学と協定を結んでいます。23の国・地域にある協定校の数は87校にも及び、年間400人以上の学生が海外で学びます。本学が海外各地にある大学と交流協定を結び、独自のプログラムで留学制度を導入し支援するようになったのは1970年代末からのこと。最初の協定校は、中国の北京外国語学院、オーストラリアのグリフィス大学等でした。1980年代は社会的に「外国語」の必要性や海外への興味関心が高まりを見せた時期で、すでに設置されていた外国語学部に加え、1986(昭和61)年4月より本学にも国際関係論・地域研究を専攻する国際関係学部が開設されました。社会的な好景気の世相と相まって大東生の中でも海外留学希望者が増加し、需要は一気に高まっています。

ただし、大東における国際関係論・地域研究、異文化交流は、創設時からの伝統でもあることはよく知られている通りです。「国際交流」「異文化理解」は1923(大正12)年の大東文化学院創設時より一つの目標でもありました。

満州事変が勃発した1931(昭和6)年には日本中で大陸への関心が高まり、学院内でも学生活動・志道会の一つとして「亜細亜部」が発足しました。アジア研究に関する講演会や研究会が盛んに開催され、それらに積極的に参加していた学生を「大陸志向」と呼び、大陸志向の学生たちは大陸への雄飛を夢見て留学を希望しました。同時期には学校をあげての「大東文化学院支那大陸旅行」も開催されるようになります。(「資料館だより」第14号、15号参照)。外務省の補助金を得て行われた大陸旅行は45日前後に渡る日程をこなしており、あたかも現在の短期海外研修制度のようです。

「アジア研究」は1938(昭和13)年開設の東亜政経科へと引き継がれています。東亜政経科開設当時は定員を大幅に上回る希望者が殺到しました。東アジア・東南アジア・南アジア・西アジアの4地域を研究対象とした国際関係学部の源流は、この東亜政経科にあると言って良いでしょう。アジア研究のスペシャリスト養成は、大東文化大学の伝統的学問の一つなのです。

現在は上記のアジアの国々のほかにも、アメリカ、イギリス、オーストラリア、タイ、ベトナム、エジプト、イラン、パキスタン、フィンランド、フランスなど多様な国々との国際交流がなされており、大東生たちは世界各地の協定校で語学を学び異文化体験しています。

(大東文化歴史資料館運営委員 浅沼薫奈)

<資料寄贈ご協力のお願い>

2015年は戦後70年に当たる節目ということもあって、多くの大学で戦争を振り返る企画が催されました。ここでは戦地へ向かった学生たちの思い、軍隊での体験、戦争遂行に加担するための作業に従事した経験など、学徒出陣や学徒動員を知るための資料が多く公開されました。大学は戦争によって多くの影響を受けると同時に、学徒出陣・学徒動員という形で未来ある学生たちを戦争に巻き込み、戦地へ送ることを止められなかった責任があります。現在、改めてそれらの記録を悉皆的に調査収集保存し、次の世代へ語り継ぎ、「大学としての責任」を果たしていこうという動きが広がっています。

本学でも戦時下の記録を積極的に集め、どのように戦争を経験したのか正確な形で残していかなければならないと考えています。70年という歳月は、多くの記憶・記録を失わせてしまいました。具体的に戦争を知る方々から出来るだけ多くのお話をうかがい、学徒出陣や学徒動員など特殊な経験だけでなく、当時の普段の学生生活がどのようなものであったかを含めて広く教えていただければ幸いです。写真や手記・手紙、寄せ書きに使われた日章旗のご提供など、皆様からのご協力を宜しく願っています。

学園に関わるその他の資料も引き続き収集しています。教科書・講義ノート、写真・映像、機関誌・新聞、在学中の刊行物、体育祭・学園祭のパンフレットや記録など、ご提供いただけるものや情報がありましたらご連絡いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。



【大東アーカイブス活動記録】(2015年4月～2015年9月)

- | | |
|--|--|
| 4.6 総務課、国際関係学部より資料移管 福田八重子氏(職員)より資料受贈 | 6.4 百年史編纂事業について打合せ 総務課より資料移管 徳植勉氏(同窓生)より資料受贈 |
| 4.10 国際交流センターへ企画展依頼・展示品借用等について 打合せ | 6.17 歴史資料館運営委員会会議 |
| 4.16 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会参加(於:明治大学グローバルフロント) | 6.19 松本宣宏氏(同窓生)より資料受贈 |
| 4.27 百年史編纂事業について打合せ 総務課より資料移管 石田千春氏(職員)より資料受贈 鈴木一道氏(名誉教授・元経営学科教授)より資料受贈 | 6.29 大東文化大学第一高等学校より資料移管 |
| 5.13 百年史編纂事業について打合せ | 7.1 百年史編纂委員会第1回会議 |
| 5.19 河田泰弘氏より資料受贈 | 7.3 第2回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」公開 |
| 5.20 展示室入れ替え | 7.16 全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加(於:明治大学) |
| 5.21 第18回企画展「受贈資料展(2) 大東史を伝えるものたち」 公開 | 7.23 総務課(秘書室)より資料移管 国際関係学部より資料移管 |
| 6.3 全国大学史資料協議会東日本部会総会参加(於:早稲田大学) | 7.30 百年史編纂委員会第2回会議 |
| | 8.24 百年史編纂委員会WG会議 |
| | 9.14 百年史編纂委員会第3回会議 宮瀧交二氏(英米文学科教授)より資料受贈 |
| | 9.25 東松山国際交流センターにて企画展資料借用 |